関西新刊案内
～著者を訪ねて～

「企業の責任」原点学んで

『今日に生き 未来に活かす 石門心学』（新風書房1575円）

下田幸男さん

長引く不況から日本経済は立ち直ることができるのか。一軒の小さな自転車店からスタートし、一部上場を果たした「あさひ」（大阪市都島区）の元会長、下田幸男さん（71）は「今のような時代こそ、経営哲学と言うべき石門心学の必要性が再認識されるべきでは」と提言する。

「いつまでも会長を務めているわけにはいかない」と65歳で同社を定年退職。「会社経営で培ってきた手法が、経営学に則っていたかを確認したい」と、立命館大学大学院に進み、経営学を学び直した。

ここで出会った石門心学にのめり込み、約4年を費やして「今日に生き 未来に活かす 石門心学」を書き上げた。

「今後は、講演などで、心学が古くさくないことを若者たちに伝えたい」と語る下田幸男さん

石門心学とは、江戸中期の思想家、石田梅岩（1685～1744年）が教え広めた倫理学・経営哲学の心学一派で、心学とも呼ばれる。京都の都市部を中心に、全国の農村部や武士の間にも浸透していく。

孔子・老子・荘子の教えに加え、仏教、神道を取り入れたほか商人としての経験から実践を重んじ、辻立ちまでして教えを説いた。

「実の商人は、先も立、我も立つことを思うなり」。こんな石田が説いた教えは「日本のCSR（企業の社会的責任）の原点として再評価されるべきだ」と下田さんは言う。

大阪市都島区の玩具店から自転車業へ転身。3兄弟で力を合わせ約300店舗の全国チェーンに育てた。

「『お金を儲けて何が悪いんですか』。平然とこんな発言をする経営者が出てきたのは社会的責任や倫理観を育むことなく肥大化した企業の精神的未熟さや傲慢さの表れ」と下田さんは憂う。

「石門心学は決して古くない。今の若者には逆に新鮮かもしれません」と期待を込めた。

（戸津井康之）

（服部素子）